【科学の不定性と社会のはざまで】

東北大学 大学院理学研究科
本堂　毅 准教授

盛和スカラーズソサエティの総会に参加するのは何年ぶりだろう。大震災直後の昨年、被災地に住む私は、出欠の返事さえ出来なかったように思う。

余田先生の講演「数値天気予報と気候予測 － 不確実性を伴う予測」への興味もあり、今回久しぶりに総会に参加した。カオスの研究者であり、JST「不確実な科学的状況での法的意思決定」プロジェクトにも携わっている私は、科学の不確実性を社会に率直に伝える必要と難しさに言及した余田先生の講演に強く共感を覚えた。

このテーマは、地球温暖化に限らず、社会の中での学問について考えさせてくれる。社会との接点では、科学者共同体の中だけでは見えてこない科学的知識の内実を、メタに問い直す必要が生まれる。科学は経験から自然法則を推論し未来を予測する営みだから、「科学的証明」も、科学者たちの相場観による『線引き』を避けえない。もちろん、科学者共同体に閉じるなら、それで問題ないかもしれない。だから、科学者の多くは、この側面に気づいていない･･･。けれど、科学的知識を元にした社会的意思決定（判断）の場面では、科学者と社会のすれ違い、諍いの原因にもなってしまう。科学的不定性（不確実性）には、確率的精度に留まらない様々な階層があるけれど、科学者も社会一般も、日本ではとてもナイーブな現状がある（「科学技術の不定性と社会的意思決定—リスク・不確実性・多義性・無知」吉澤 剛、中島貴子、本堂 毅：「科学」（岩波書店）印刷中）。大震災は、地震学、津波の予測、そして原発災害などの痛ましい出来事を通して、日本の科学者や社会が思考を怠ってきた問題を照らすところとなった。

盛和スカラーズソサエティは、自然科学だけでなく、人文・社会科学も含めた学術全般の一線の研究者が集まっている。この科学的不定性と社会の問題は、自然科学者だけで議論できる問題ではなく、自然科学、人文・社会科学と共に英知を出し合うことが不可欠だ。3S が個別学問の枠を超え、この大きな課題を率直に語り合う場になるならば、3S だからこその貢献を社会にできるのではないだろうか。今年の総会に出席して、この思いを強く感じた。

8 月 26 日（日曜日）、東京・一橋記念講堂で私たち JST プロジェクト主催による国際シンポジウム「科学の不定性と社会　～いま、法廷では..？～」を開きます (http://www.sci.tohoku.ac.jp/hondou/0826/)。3S 会員の皆さんのご参加と、率直な意見をお待ちしています。

1029 字